# 源氏物語はどう翻訳されて来たか―与謝野晶子の挑戦

神野藤　昭　夫

## 一　晶子の生涯を貫いた源氏物語

昨年の一月、桃園文庫展というものを見て来ました。池田亀鑑（一八九六～一九五六）は、日本近代における、文献学的な国文学の方法を確立して、大きな業績をあげたひとです。

『源氏物語』は、そのオリジナルテキストはもとより、平安時代の写本さえ伝わっていません。現在、私たちの読んでいる『源氏物語』は、じつは紫式部が書いた『源氏物語』そのものから、二百年ほど後の姿を再現しようとしたものです。写本としてたくさん伝わっている『源氏物語』を分類、整理して、もっとも基準となるテキストとして大島雅太郎という蔵書家が所有していた写本、大島本を選び、それをもとに、主要な伝本の校異、つまり写本の本文の違いを、池田がリーダーとなって、一覧できるようにして、信頼できる源氏物語本文の再建をめざした仕事が、彼の最大の業績です。

その池田の研究は、戦後、『源氏物語大成』（一九五三～一九五六）として結実しますが、その中核をなす部分は、昭和十七年、一九四二年の十月に、『校異源氏物語』として先に刊行されております。

晶子は、この『校異源氏物語』の出た年の昭和十七年の五月二十九日に亡くなっております。

池田亀鑑の『花を折る』（中央公論社　昭和三十四年）という随筆集の中には、昭和十五年五月五日に、晶子のもとを訪ねた時の思い出の文章が出て来ます。

この日、晶子のもとを訪れた亀鑑は用事が終った後、『源氏物語』の作者をめぐって、晶子と議論の応酬をしたらしい。「おだやかな物のいひ方だが、自説に対しては一歩もゆずらない。三十分あまりも、はげしく論じあつた」といいます。そのうち、晶子はさりげなく座を立ったと思ったら、やがて色紙を二枚もってあらわれ、「これを記念に」とほほえみながら渡された、とあります。

図版（本文末尾参照）は、この文章「つつじ」の池田亀鑑直筆の原稿です。本学の和田琢磨先生ご所蔵のお宝、それを拝借して、皆さんとこうして眺めているわけです。さて、色紙には、こう書かれていたとあります。刊本の『花を折る』とは表記に相違がありますが、直筆原稿によって示せば、次のとおりです。

須磨の山藤も桜も幼なけれ京の流人の去年うゑしごと
花見れば大宮の邊のこひしきと源氏にかける須磨ざくらさく

最初の歌は、あなたも私も、京の流人、光源氏が去年植えたばかりの、幼い藤と桜のようなもの。次の歌は、下句の「源氏にかける」に、源氏に書いてある意とお互いの源氏にかける思いの意味がかけてあって、それゆえに議論の花桜が咲いた、ということを歌ったものでしょう。

池田は、こういいます。多年、万巻の写本を調べて、源氏研究に努力を傾注したけれども、「わたしは古典のいのちにふれることにおいて、この老いたる一女性に遠く及ばないのだ」、そう思って「悲しかった」といいます。

ところが、この二人が会った翌五月六日。晶子は、湯殿で脳溢血のために倒れ、それ以降左半身不随となって、思うにまかせぬ二年の後に世を去ることになります。

二人が会った前年の、昭和十四年十月三日に、上野精養軒で晶子の『新新訳源氏物語』全六巻の完成祝賀会が開催されたばかりでした。現在では『全訳源氏物語』として広く知られている『新新訳源氏物語』を書き終えて、わずか七か月あまり後に、晶子は倒れたことになります。

私のような古典の勉強をしている者から見ると、晶子の生涯は、少女時代の『源氏物語』との出会いの日々から始まり、この『新新訳』の訳業の完成からほどなく、巨木が倒れるように、その死を迎えた、『源氏物語』に貫かれた一生であったように思われます。

この生涯にわたる「古典のいのちにふれる」晶子の訳業には、どのようなものがあり、どのような特色をもっていたでしょうか。晶子は、大きく見ると、三度、『源氏物語』に挑戦している、といえます。

第一は、現在は残っていない「幻の源氏物語講義」

第二は、明治末年から大正初年にかけて刊行された『新訳源氏物語』

第三は、現在、晶子の『全訳源氏物語』として知られている『新新訳源氏物語』

この三つの『源氏物語』訳業が、どのような苦闘のドラマから生み出されたか。そして、それぞれがどのような実態と特色をもって、大きな意義を果たして、今なお、私たちの前にあるかを、「与謝野晶子の挑戦」と題して、お話ししたいと思います。

## 二　晶子は『源氏物語』とどのようにして出会ったか

晶子は、いつ、どのようにして『源氏物語』と出会ったのでしょうか。

与謝野晶子は、大阪、堺の「駿河屋」という老舗の和菓子屋さんの娘として、明治十一年、一八七八年に生れていますが、十二前後から、家の蔵にあった源氏物語を取り出して読み耽っていたことをしばしば回想しています。密室でのひたすらな〈耽溺〉というにふさわしいような源氏体験、今風にいうなら源氏オタクの日々が原点としてあった、ということがわかります。

この晶子が最初に出会って、繰り返し繰り返し読んで、彼女の体内に物語世界がしみこむように、親しんだ本はどんなものだったでしょうか。



現在、鞍馬寺には、与謝野晶子旧蔵の『源氏物語』がありますが、これなどはその出会いの本である可能性が高いか、と思っております。これは、承応三年（一六五四）版の「絵入源氏物語」と呼ばれる版本を、縮小したバージョン、小本と呼ばれるものの実際の姿です。挿絵が二四六図も入っているので、一般に『絵入源氏物語』と呼ばれています。

「絵入源氏物語」の桐壺巻の場面を見ていただきますと、絵があるほかに、注記としては、主語などがちょっと書き込まれているていどです。注だけを集めた「爪印（つまじるし）」とか「系図」「引歌」などの別冊もついてはいますが、晶子の回想に、「私は中に人を介せずに」つまり「注釈者」「解説者」などを介在させずに「紫式部と唯一人相対して」『源氏物語』を読んだ。そう言っておりますが、それにふさわしい本ではないか、と思っております。

しかしながら、江戸時代以来、もっとも普及したテキストであった『湖月抄』が出会いの書であったろうとする見方もあります。

これも実際の『湖月抄』をごらんいただきますと、注やら傍記、つまり晶子のいうところの「人」がたくさん出てきていることになりますが、晶子はこの『湖月抄』の悪口を繰り返し言っておりますので、逆に『湖月抄』をよく眺めた経験があることを自白しているようにも思われます。

## 三　晶子は『源氏物語』力をどのようにして高めたか

こういう『源氏物語』との出会いの後、晶子はどんな場でどんなふうにして自分の『源氏物語』力を高め、その実力を周囲に認められるようになったのでしょうか。

渋谷の道玄坂、有名なスクランブル交差点のあるところ、右手に109を眺めながら、ちょっと坂を登って、井の頭線の方角に左折したところに、「東京新詩社跡」という柱が立っています。『明星』という雑誌を生んだ東京新詩社はここに始まるわけです。晶子が上京して、鉄幹のもとに身を寄せるのは、明治三十四年、一九〇一年の六月のこと。その八月に歌集『みだれ髪』が出て、十月に鉄幹と結婚する。

東京新詩社といっても、鉄幹と晶子の住む狭い家にほかならないわけですが、そこで開かれる読書会のような場を通じて、晶子は『源氏物語』力を高め、そこに参加する人たちの間から、しだいに彼女の『源氏物語』の実力が知られるようになっていったらしい。

資料には、『明星』から拾いだした、会のようすをうかがうことのできる関連記事を拾い上げてみました。『明星』の誌面では、小さな埋め草のような記事でしかありませんので、確認するのがたいへんです。

このような東京新詩社を場とする経験は、晶子の『源氏物語』理解をどのように特色づけたでしょうか。

晶子二十三歳のデビュー作、歌集『みだれ髪』は、複製本を見ましても、縦長、細身のおしゃれな装釘であることがわかります。中を開いてみると、挿絵から、明治の浪漫主義というもの、明治の人びとの泰西ヨーロッパの文化・芸術への憧れがどんな姿をしていたものであったかを感じとることができるのではないでしょうか。

『みだれ髪』は、歌の力だけでなく、新しい時代の息吹を感じさせる視覚的な、ヴィジュアルな力、活字だけにとどまらない魅力をもってもいたわけです。

この挿絵は、フランス帰りの黒田清輝に招かれて、東京美術学校の助教授となり、長く近代日本の洋画会をリードした藤島武二の手になるものです。上野の東京芸大のキャンパスに入りますと、すぐ右手方向に、この藤島武二の胸像があります。

『明星』のサンプルを見ていただきますと、右が『明星』の明治三十五年四月号の表紙、左が五月号の裏表紙です。この表紙も藤島武二の手になるものですが、表紙の下のところを見ますと、「畫入月刊文学美術雑誌」と書かれています。『明星』というのは、翻訳、評論、小説、詩、そして短歌や俳句などの、文学の世界と美術の世界とを結びつけた、斬新でモダンな雑誌だったわけです。

この『明星』を主宰した鉄幹という人は、日本の伝統的な文学を、新しい時代の感覚で摑みなおし、新たな息吹を吹き込んで甦らせる、そういう浪漫主義という芸術潮流のパッショネートなプロデューサーであって、晶子は、この新詩社の新しい風のなかで、『源氏物語』を大胆新鮮に読解する、そういう自由とそれにふさわしい力量を身につけていったのではないでしょうか。辛気臭い、訓詁注釈いってんばりの源氏物語解釈などとは、遥か遠いところで『源氏物語』を斬新自在に読んで、晶子は、ここで「作品のいのちに迫る読み」を深めるとともに、周囲の人びとにその力を知られるようなっていったのではないでしょうか。

やがて、彼女は、閨秀文学会というところで講義をしたり、新詩社で源氏物語の講義をするようになります。

しかし、明治四十一年の十一月には、『明星』が百号をもって終刊に追い込まれて、このように源氏を講義をしたりすることじたいが経済的に厳しい生活を支える力にもなって来ていた、ということでもあります。

そして、小林政治という人から「源氏の講義」の執筆依頼をうけることになります。晶子三十一歳の年のことです。

## 四　幻の『源氏物語講義』のたどった運命

そういう生活の苦境のさなかで、この依頼をうけた晶子は、「この度の御文何も〳〵私どものために御たて下され候ひし御もくろみと涙こぼれ候」と言っております。寛・晶子亡き後、小林政治もまた「同家の厨房費を補助するために」つまり台所の費用の助けにでもなればと思いついたと、そう回想的に内情を明かしております。

小林政治、号天眠（一八七七～一九五六）という人は、鉄幹・晶子のかつての文学仲間で、後に実業界に身を転じて、『毛布五十年』という本もありますように毛布の卸業で成功したひととして知られております。しかし、それだけにはとどまりません。大阪変圧器株式会社、現在では、ダイヘンという変圧器などで知られる電気機器メーカーの創業者で、そういう実業家である一方、芸術・文化に対する厚い理解と、鉄幹・晶子に対する深い尊敬の念を抱いて、二人の生涯を通じて物心ともに援助を尽くした、文化の擁護者、盟友でした。

その彼が、明治三十六年に、志を同じくする仲間とともに「天佑社」という文学結社を設立しますが、やがて明治四十三年一月から「百箇月」の間、お金つまり資本金を積み立て、大正七年（一九一八）に天佑社という出版社を東京に設立しようではないかということになって、その最初の目玉として、晶子に『源氏物語講義』の執筆を依頼したというわけです。

これに対する晶子の返事では、大部にはなるけれども「源氏の講義」を書きたいという意向を述べ、それを百か月で書き上げます。それには、毎月二十円の保護、経済的支援が必要になるが、この仕事を「私一生の事業」とするつもりであると、こう言っております。

さらに、「式部のかきしものを直覚に私の感ぜしところを講義いたさむとおもひ候　式部と私との間にはあらゆる註釈書の著者もなく候」、つまり、私は、紫式部とじかに向き合って、ああだこうだという註釈者たちの意見に頼るのではなく、私ししんが読み解き、感じたところを直接的に講義しようと思う、というわけです。びっくりするほど率直かつ、すごい自信ですが、これから書こうとする「源氏物語講義」の本質、さらには生涯にわたる晶子の『源氏物語』の訳業全体を理解するうえでも重要な発言です。

晶子は、経済的支援をも兼ねた天眠の提案に、さっそくに執筆にとりかかったにちがいありませんが、慎重に言えば、明治四十三年一月から原稿とともに支援の金を貰い始めたということになりましょうか。

明治四十三年十一月発行の『早稲田文学』に掲載された文章では、「源氏物語の講義だけを書肆でも無い大阪の××さんが引受けて、毎月幾分の報酬を出して八年満百箇月で書き終る様に計らつて頂いた厚意は何より難有い」と言っておりまして、明治四十三年には、まちがいなくこの執筆が進められていたことを確認することができます。

この後、天眠は、毎月二十円、原稿料を支払い続けます。天眠は与謝野家にとっては、大きな支援者であったことになりますが、彼をパトロンなどというのはふさわしくありません。寛・晶子への深い尊敬と理解が一貫して流れておりまして、後に天眠の三女迪子は、与謝野家の長男で医者となる光と結婚することになります。

しかしながら、「百箇月」すなわち八年余りの約束で書き始められた、この原稿はなかなか書き終わりません。その間にも、原稿が遅れたり、書けなかった言い訳の手紙を寛が書いていたりもします。のちには毎月八十枚書きますからと約束をして、五十円を送ってもらっています。

しかし、結局のところ、晶子の原稿、大正七年の天佑社の設立の時には間に合いませんでした。できあがっているのはちょうど半分ぐらいと書き送っています。しかも、寛の書簡をみますと、当初の「註釈」の方針から「逐次的講義」の方針にあらためたこともあって、なおあと五年はかかるだろうと言っております。

大正八年二月のある人にあてた書簡では、「殆ど私の力の半分をつくして居る仕事でございます。」、さらに「時々それをはたさないで死ぬかと悲しくなるしごとなのでございます。」とまで言っております。

この後に晶子は、「宇治十帖」の前まで書きついだようですが、

あいついで不幸が訪れます。

まず、大正十一年五月十四日、天眠宛の書簡

「天佑社の現状もまことにおきのどくなることとかねて存じ居り候ひき。私の源氏の原稿もわろきことになりしと思はぬ時なく候。」

とあります。

第一次世界大戦後のヨーロッパでおこった大恐慌の嵐が天眠の事業にまで及んで、天佑社もまた、閉鎖のやむなきにいたったのです。

こうして、長年にわたって書かれ、天眠のもとに毎月送られ、脚光を浴びる日を待っていたおびただしい分量の、しかしまだ完結にはいたらない原稿、それが晶子のもとに送り返されて来る。そして、さらなる不幸がおきます。

「荊妻の「源氏」の原稿も一切文化学院と共に焼け申候。」

数千枚に及ぶ『源氏物語講義』の原稿が、大正十二年、一九二三年九月一日。あの関東大震災で焼けてしまったわけです。

じつはひそかに天祐社でも写しをとってあったらしい。それも焼けてしまったといいます。

時に晶子、四十五歳。天眠からの依頼を承諾したのは、三十一歳の時なのでした。

この間、全身全霊を打ち込んで書いた著作は、こうして幻の仕事と化してしまったわけです。

十余年わが書きためし草稿の跡あるべしや学院の灰
失ひし一万枚の草稿の女となりて来りなげく夜

晶子の痛恨の思い、今の私たちもまた共有できる気がいたしませんか。

## 五　幻の「源氏物語講義」はどのようなものだったか

それにしてもこの幻の「源氏物語講義」はどのようなものだったでしょうか。

じつは、まことに幸運な事情から、この幻の『源氏物語講義』の原稿がたった一枚残っているのです。

資料には、これを翻字したものをあげてあります。

さらに、今の原稿が幻の『源氏物語講義』の原稿の一枚であることをわからせてくれる晶子の書簡の一節と、天眠が注として解説してくれている情報のおかげで、この間の事情がわかります。

原稿の左上には「十八」とあります。これは晶子の直筆です。原稿には「抹消や書き直し」がたいへん目につきます。そこで晶子はこの「十八」を清書したものを綴じてちゃんと天眠のところへ送っていたらしい。ところがあとになって、この「十八」とある草稿が家にあるのに気がついて、あっ入れ忘れたと勘違いをしたらしく、これもまた送ってしまった。

天眠の方では、前に送ってもらった原稿はじつはちゃんと揃っていたので、後から送られてきた、この原稿は手紙とともに別にしてあった。そして、天祐社の閉鎖とともに、数千枚の原稿は、晶子の方に送り返された。ところが、晶子が入れ忘れたと勘違いして後から送った方の原稿だけは、手紙とともに天眠の手許に残され焼けずにすんだ、というわけです。

ですから、この原稿は、『源氏物語講義』がどのように書かれていたか、その中味と執筆の現場とを生々しくうかがい知ることのできる、きわめて貴重な資料ということになります。現在、この資料は、小林家から寄託されて、京都府立総合資料館にありますが、この書簡と原稿が、「大阪変圧器株式会社」つまり今のダイヘンの封筒に入れられた状態で、私の目の前に出て来た時には、ちょっと感動しました。

この原稿は、じつは「薄雲」巻の一節、光源氏は、明石の君が生んだ幼い姫君を迎えとって、紫の上に育てさせることにする。その紫の上が姫君をいつくしんでいるようすをみて、心の中で、あれこれ思う、そういう場面です。

原稿を見ますと、中に○印があって、「いかにぞや云々。』」とあります。この部分は、『源氏物語』本文のどこにあたるか、該当箇所の頭の部分の引用です。それに続く「かうなし居れどこれが」の部分からが、原文の意味内容を踏み込んで、語り直し説明するかたちになっています。それがおしまいから四行目の「は思ひ給ふとなり」まで続いています。「となり」とあるのは、「ということである」という説明・註釈のスタイルです。

そこで、もうひとつの○印の直前をみますと、「と云ふなり」とあります。

ということは、これは源氏を現代語に訳出した文章そのものだけが書かれたものではない、ということがわかります。さらに本文の該当箇所を晶子の言葉で踏み込んで内容を説明する体裁になっている、そういう文体であるということです。

ここの『源氏物語』の部分引用と『源氏物語』の本文との対応関係に注目してみると、説明内容の部分は、『源氏』の本文と対応していて、内容的に切れ目がない、ということがわかります。

たった一枚の原稿から、推し量るのは勇気がいりますが、この『源氏物語講義』は、じつは全文にわたる釈文、説明、講義になっているのではないか、ということが推測されます。

寛は「逐次的講義」に方針を変えたので、完成までにはあと五年はかかるだろうと言っていました。まさにその、本文をあげては講釈し、また本文をあげては講釈してゆく、「逐次的講義」の実態がここに認められるということです。

この原稿は、大正四年五月十一日に書かれた手紙の中に入っていたものです。「薄雲」巻ですから、『源氏』全体の三分の一ぐらいのところにあたります。

後に晶子は、「大正年間に、源氏の全講本」を宇治十帖の前まで書いていたと言っております。これは「全文にわたる釈文、説明、講義」だろうという推測を裏付けてくれるものと思います。

しかも、あれこれ注を羅列してみたりするのではなく、この『講義』は、終始一貫あくまでも晶子の理解を晶子の言葉で語ったところに大きな特色があります。

ここでは、これ以上踏み込むのは控えますが、ここで述べられている内容を、さまざまな注釈書と見比べてみると、たんなる解釈にとどまらない、晶子の敷衍的説明として独自性が発揮されている、そういうことがわかります。きわめて個性的な『源氏物語全講』と言ってよい内容のものである、ということです。

これが、幻の『源氏物語講義』の姿に対する私の復原的理解で

す。

晶子じしんが「私一生の事業」と言っておりましたように、この講義は晶子生涯をかけた仕事であり、これが完成、出版されていたならば、燦然として輝く、個性的な大業績となったのではないでしょうか。あらためて、まことに残念、というほかありません。

## 六　画期的な事件だった『新訳源氏物語』の出現

次に話題にするのは、明治四十五年（一九一二）から大正二年（一九一三）にかけて金尾文淵堂から出版された『新訳源氏物語』四冊の話です。

『新訳源氏物語』第一巻は、天金、菊判という判型で、贅を尽くした体裁の本で、紫式部が石山寺の如意輪観音に祈願して、琵琶湖にあがる月を眺め、源氏の間で「源氏」を書き出したという伝説にもとづく図柄です。

四冊すべてを函からとりだして、オモテ表紙を並べてみますと、豪華で贅沢な図柄であることがおわかりいただけると思います。

木版刷の挿絵も見てみますと、「玉鬘」巻は、玉鬘と右近との再会する長谷寺の場面。遠くに舞台が見えます。もう一枚、夕霧が死の床にいる柏木を見舞う場面では、手前の屏風の背面が銀色に輝いています。どちらも見事です。

これは、表紙・装丁に同じく、当時、新進の洋画家中沢弘光（一八八七～一九六四）の手になる、彩色の挿画が、各巻ごとに一枚一枚木版刷で挟み込まれている豪華な本です。つまり、この本は、晶子の訳というにとどまらない、本じたいが、版元・画家・木版制作などの専門集団とのコラボによる、贅を尽くした、ヴィジュアルな工芸的「作品」として出現したということができます。後にパリに出かけた晶子は、この上巻をオーギュスト・ロダンに献呈して、ロダンをいたく感動させていますが、それは、この本じたいがそういう力を持っていたからでもあると思います。

資料にA系統と記した(1)のこの本は、後に金尾文淵堂が版権を手放しまして、次の(2)、(3)では版元・発売元がかわって挿絵も白黒のたんなる印刷の合冊二冊本になり、(4)(5)(6)では、さらに発行・発売元を変えて分厚い一冊本となって、出版されつづけます。活字もだんだんくたびれて、絵など輪郭もはっきりしない、みじめなものになってゆきます。

有名な「若紫」巻。「雀の子をいぬきが逃がしつる」という場面の、右上の雀に注意してみましょう。二冊本になりますと、白黒になりますが、飛び去ってゆく雀の姿が認められます。ところが、一冊本、それも後半の刷りになると、もはや雀のありかは認められないというほどくたびれております。こんな姿を晒しても売り物になったのかとびっくりいたします。

そして、(7)は『新訳』初版の面影を甦らせる、少しは見栄えのよい四分冊に体裁をあらためて、『新訳』最後の輝きをみせて、『新新訳』が出ると、対抗するかのようになお版を重ねてみせております。

この『新訳源氏物語』には、もう一種類、資料にB系統と記した版のものがあります。それが、函の印象が異なるもの二組がありますが、入っている本は両方ともに初版です。これはA系統の最初の



本の刊行が終わった翌年の大正三年十二月に、三六判変型、今でいえば新書判ほどの大きさの四冊本がいっぺんに出ております。

装丁は有島生馬。豪華本が三円であるのに対して、一冊一円ですからこちらは普及版をめざしたのでしょう。

この普及版の奥付には「縮刷発行」と書いてありますので、A系統の文字通り縮刷版かと思うとまちがいでありまして、上巻などは、本文にかなり手が入っております。じつは、晶子の『新訳源氏物語』の本文には、Aの元版とBの推敲版との二系統があることになります。

こちらの版は、初版とは函がちがいますが、中身は同じで、大正十一年の版のものです。

この版も大正十五年に至って、金尾文淵堂は、資金繰りに苦しくなったらしく、豪華本の版権を売って、この普及版の四冊本の方を二冊本にし、梶田半古の挿絵に奥村土牛の表紙と装丁で面目を一新した版を出しております。

このように『新訳源氏物語』の刊行の軌跡をたどってみますと、『新訳』が長きにわたって売れ、日本近代における『源氏物語』の広汎な読者層を開拓し、魅了し、いかに大きな普及の役割を果たしたか。それを実感していただけるのではないでしょうか。

晶子のこの『新訳』のなし遂げた成功の基盤があってこそ、その後の谷崎潤一郎を初めとする、大手出版社と作家たちとの連繋による『源氏物語』翻訳が出現し、次々と商業的な成功を収め、さらに、歌舞伎・映画・絵画、そして漫画や音楽など分野を横断する源氏芸術文化とでもいうべきものが醸成され、今日にいたるということができます。

ですから、『新訳源氏物語』の出現は、日本の『源氏物語』翻訳史における画期的な事件であった、と言えます。

## 七　『新訳源氏物語』はいかに書かれたか

では、この『新訳源氏物語』はどのように書かれたものでしょうか。

『新訳源氏物語』のあとがきをみますと、『新訳源氏物語』は、明治四十四年一月に稿を起こし、大正二年十月に完成したとありますけれども、じつはその間、二年と九か月しかありません。晶子三十三歳から三十五歳の間。この間に「二度産褥の人ともなつて」、すなわち二回出産しております。さらにパリへ旅立った寛を追うようにして、明治四十五年五月に欧州へシベリア鉄道経由で旅立ちます。出版途中の『新訳源氏物語』の中巻の校正を、なんと森鴎外に頼んでです。そして、寛恋しさに欧州に出かけてみると、こんどは残してきた七人の子供たちへの思いが募るばかりでなく、妊娠が判明して、予定を早め、十月に船で帰国することになる。ですから、この二年九か月から、そういう期間を差し引いてみると、これはまさに「早業」どころではない、超人的仕事というほかありません。

では、その実態はどのようなものでしょうか。

『源氏物語大成』の本文を、原文の文字量と見て、これをもとに、『新訳』の文字量と『新新訳』の文字量とを比較してみますと、『新訳』は、原文の文字量に対して七七・七%。これに対して全訳である『新新訳』は、一四七・三%。つまり『新訳』は、完訳ではな

く、縮訳であることがわかります。

なぜ、縮訳として登場したか。その現実的な理由には、二つ考えられます。

ひとつは、既にお話ししたように、晶子は『新訳』に先立って、『源氏物語』全編にわたる「講義」を書き始めていたこと。

もうひとつは、金尾種次郎の企画じたいもまた当初から全訳を意図したものではなかったと考えられることです。

『新訳源氏物語』を頼んだ経緯について、金尾は、文芸評論家で翻訳家でもある内田魯庵のところによく出かけていたようで、その魯庵に勧められ、晶子も魯庵先生のお勧めならというわけで、「最初は菊判千頁位の予算でか、つて頂くことにした」と言っています。

魯庵自身も、当時、金尾文淵堂から、『イカモノ』と『二人畫工』という本を出しております。『イカモノ』というのは、変な題名ですが、モーバッサンの焼き直しで、翻訳とも翻案ともつかないところから、ニセモノ、いかがわしいものという意味でこういう書名をつけた、と本人がそう言っています。

『二人畫工』の方は、ポーランドの作家シェンキヴィチの英訳本からの翻訳です。ここには、明治期の海外文学が、どんなふうにして「翻訳」されて人気を博し普及したかという、日本近代の「翻訳」の一面をかいま見ることができます。

こういう背景と「千頁ぐらい」との限定から考えてみますと、最初から原文に忠実な畏まった全訳などではなく、今に通ずる翻訳小説、大衆にとっても魅力的な読み物として「訳して貰ったらどうだ」というつもりで魯庵は言い、金尾もまた、そういう話として受けとめ、さらに晶子もまたそういう性格のものであることを承知したうえで、『新訳』にとりくんだということではないでしょうか。

その結果、晶子じしんが、「必ずしも原著者の表現法を襲はず、必ずしも逐語訳の法に由らず、原著の精神を我物として訳者の自由訳を敢てした」著作として出現することになったと見られるわけです。

## 八　梗概書の伝統と『新訳源氏物語』

では、その自由訳なるものの実態、個性がどのようなものであったか。かいま見てみたいと思います。

いったい『源氏物語』は、代々の歌人にとって、きわめて大事な和歌教養の書としても読み継がれて来ました。

有名な例では、鎌倉時代の初めに開催された『六百番歌合』では、新旧両派の歌人たちがはげしい議論を戦わせていまして、新古今時代を考えるうえでは重要なものですが、その判者であった藤原俊成は、「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事也」、歌詠みが源氏物語を見てないなんてとんでもないことだと言って、当時の歌人に『源氏物語』がなくてはならぬ和歌教養であることを強調しております。

また、和歌の上句と下句を分けて詠み、下句の七・七に、さらに五・七・七を繋げてゆく新たな文芸へと発展して行った連歌というジャンル、その確立に大きな役割を果たしたのが、南北朝時代の二条良基（一三二〇～一三八八）ですが、その良基も『九州問答』という指南書のなかで、「源氏寄合は第一の事也」（『九州問答』〈伊地知鐵男編『連歌論集』上・岩波文庫〉）と言っています。

となると、歌人だとか連歌師たち、さらには連歌から生れてくる連句を詠む俳人たちも、みんな『源氏物語』を教養として身につけなくてはならない。しかし、『源氏物語』を全部読んで、しかもそれを教養として生かしてゆくということは、昔の人たちだってたいへんだった。

そこで、『源氏物語』のたくさんのダイジェスト本が生れて来る。これを梗概書と言いますが、ここでは、「関屋」という短い巻の例を、二つほど見てみましょう。

そのひとつは『源氏大鏡』。これは、『源氏物語』に出てくる歌をすべて掲出して、しかも『源氏物語』に実際に出てくる文章を「めづらしきぬい物、くゝりぞめの旅姿ども、せき山よりさとくづれ出たるは」というふうに引用アレンジして、歌がどういうところで出てくるか、臨場感を醸すように語ったりするところに、特色があります。

こちらは、『源氏小鏡』の慶安四年（一六五一）版です。この本では、ダイジェストに続けて、「これをとりあはせ石山せき山などに付べし」とありますが、これは、連歌で前句に「石山」とか「せき山」とあったら、「せきや。し水。ゆきあふみち。しほならぬうみ。せきとめがたきなみだ」などの語を付合として用いてよいということです。この『源氏小鏡』がどういう実用性を意図して作られ、読まれたかがはっきりわかります。

もっとも、『源氏大鏡』も『源氏小鏡』もたくさんのバージョンがありまして、こういう付合の指摘などがカットされたり、新たに挿絵が入ったりして、時代とともに変化してゆくのがおもしろいところです。

江戸時代に入ると、はじめから『源氏物語』のストーリーをもう少し幅広い読者層を狙って語ったたくさんの絵の入った『十帖源氏』とか『おさな源氏』とかいろいろ出てきます。

中でも、『源氏物語』の梗概書の白眉とされているのは、この北村湖春の『源氏物語忍草』です。湖春は『湖月抄』を書いた季吟の息子ですが、こういう梗概書類の普及が、江戸時代における幅広い源氏教養の母胎となって、文学だけにはとどまらない源氏文化が花開くことになるわけです。

こうした梗概書とよばれる伝統の中に、与謝野晶子の『新訳源氏物語』をおいてみますと、『新訳』は、近代版梗概書という一面があることになります。

しかしながら、伝統的な梗概書に出てくる歌は、当然のことながら、『源氏物語』中の歌そのものです。日本の現今の現代語翻訳にいたるまで、歌は歌として、注や訳を付することはあっても、原文であげるのが大原則になっています。考えてみるとふしぎでもありますが、和歌は『源氏』の命であり、聖域としてこれを尊重する、そういう暗黙の考えが、今にいたるまで呪縛のように生き続けていることになるでしょうか。

## 九　歌まで翻訳した『新訳源氏物語』

ところが、晶子の『新訳』は、ちがうのです。『新訳』では、なんと『源氏物語』の歌を、晶子が自分の歌に読みかえている、つま

り和歌を和歌で翻訳する事例がたくさん出て来て、伝統的な梗概書とは、一線を画す一大特色を示しています。

その実態は、どのようなものか。『源氏物語』には、七九五首の歌が出てくるのですが、『新訳源氏物語』では、それと対応する歌が一三七首出てきます。「対応する」というのは、ばっさり省略している例ばかりではなく、歌を会話にしたり、手紙にしたり、なかには詩の形式にして、翻訳している例もあるからです。要するに『新訳』には、一三七首、歌が出てくるということなのですが、ところが、そのうち『源氏』本文の歌とは異なる、つまり晶子が詠みかえを試みている歌が九〇首にも及んでいるのです。『源氏』本文の歌と同じ姿の歌は、四七首ということになります。

その具体例を二つあげてみましょう。

「幻」巻、源氏が生きて登場する最後の場面で出てくる歌を、晶子は「もの思ふと過ぐる月日は知らぬ間に年もわが世もけふや尽きぬる」と詠んでいます。私たちにもすっきりわかる歌です。ところで原文は「もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世もけふや尽きぬる」です。ここはどうして「過ぐる月日も」なんだろうか、と言いますと、この歌は藤原敦忠の歌の上句「もの思ふと過ぐる月日も」をそっくりそのまま利用したものだからです。晶子は、自分の訳出した本文の文脈には「過ぐる月日は」がよい、ふさわしいと判断して、晶子の体温が感じられる歌に、意識的に変えています。

これは、小さな例ですが、『新訳』の歌を一読しただけでは、もとの『源氏物語』歌がわかりにくい、詠みかえ度の高い例があります。

ここでは、「須磨」巻に出て来る源氏と朧月夜との贈答についてみましょう。

「賢木」巻の巻末は、源氏と朧月夜との密会の、まさにその現場が露顕して、右大臣からそれを聞いた弘徽殿太后が「このついでにさるべきことども構へ出でむに、よきたよりなり、とおぼしめぐらすべし」、つまり源氏失脚の工作をはかるいいチャンスと思ったろう、と語り手が語ったところで、終っています。

読者も、ハラハラする気分にさせられるわけですが、「花散里」という短い巻をはさんで、「須磨」巻の『新訳』では、どう語られているでしょうか。源氏と朧月夜との別れの歌に注目してみますと、

君を見て掟にふるる日も知らず死なんとばかり恋ひにけるかな
（上巻・須磨）

源氏は、今、こうして須磨の地にあることを「掟にふるる日」であると言っています。あなたに逢って、掟にふれて、こういう日の来るとも知らず、死ぬばかりにあなたのことを恋い慕ったのでした」という。

それに対して、朧月夜は

死ぬと云ふとがにはわれの当たるべし恋しき人をまたも見ぬまに（上巻・須磨）

いやいや「死というとがにあたるのは私の方でございましょう。恋しいあなたに再びお逢いできないうちに」と答えます。きわめて直截的で情熱的な贈答になっています。しかも「掟にふるる」とか「死ぬと云ふとが」とか、二人の禁忌を破った恋が、須磨流謫の原



因であると、本人たちが示唆していることになります。

『新訳』の「須磨」巻の冒頭では、「源氏の君はもう二位の上達部でもなければ、右大将でもない。陛下の寵姫を偸み奉つたと云ふ罪名にこの官爵は削られたのであつた。」と語り始められているのです。「須磨」巻の冒頭部分を「陛下の寵姫を偸み奉つたと云ふ罪名に」とここまで直截的にふみこんで表現することについては、『源氏物語』の読みとして、議論のありうるところです。しかし、『新訳』の源氏と朧月夜の歌は、晶子のこういう理解の反映として、詠まれているということになります。

源氏の原文の歌は、「逢ふ瀬なきなみだの川に沈みしや流るるみをのはじめなりけむ（光源氏）」というものです。この歌について、室町時代の注釈書『細流抄』は、「無実なる事のやうによみ給用意あさからざる也」と言っています。「逢ふ瀬なきなみだの川」とは「あなたとは逢う時とてなかった恋しさ悲しみのために涙が川のように流れてならない」という意味で、この歌が人の目にふれても、「あたかも実事がなかったかのように詠んでいる、その注意深い詠みぶりが大事なところだ」と評しているわけです。とすると、晶子は源氏の歌の周到さになんか頓着しないで、源氏の禁忌の情熱を暴露してしまっている、ということになります。

晶子は、『新訳』では、既にみたように「原著の精神を我物として訳者の自由訳を敢てした」ということであって、そういう方針のもとに、大胆でクリエイティブな歌を詠んで物語の輪郭線をあざやかに描いてみせたことになります。

ところで、『新訳』には、もうひとつ、注目すべき現象、謎があります。

四巻ある『新訳源氏物語』の各巻が、原文に対して、どれくらいの文字数で訳出されているか。その推移に注目してみますと、均等に短いというわけではないのです。上巻は五七・三%、中巻は六〇・八%。それが下巻の一になると原文の九三・五%といっきょに跳ね上がる。さらに下巻の二になると、一四〇・二%、というふうに増えて、ほとんど『新新訳』に近い分量になっております。

どうしてこんなふうになっているのでしょうか。

ところが、晶子じしんは、「この書の中巻以後は原著を読むことを煩はしがる人人のために意を用ひて、ほとんど全訳の法を取つたのである」と言っております。だいたい下巻が一・二に分かれているのは奇妙です。抄訳でなくて、もっと原文に近くという訳出方針の変更がこんなかたちになったというわけですが、『源氏物語』じたいが、しだいに登場する人物の心のひだひだをえがくことに主題が移って来るのと呼応して、巧まざる『新訳源氏物語』の個性と魅力になっているのではないか、ここでは晶子の肩をもって、そう説明しておくことにいたします。

それにしても、『新訳』はなぜこんな短期間に、一気に書かれ、なおかつ偏頗な、つまり偏った訳出量になっているのかは、大きな魅力的な謎です。ひとつには、寛の渡欧にからむ経済的な事情と、晶子じしんがヨーロッパに出かけて受けてきた刺激が大きく反映していると思うのですが、この謎に迫るには、晶子のパリ経験を追って、私たちもパリにゆかなければなりません。しかし、今日は、パリに行くだけの余裕がありませんので、残念ながら、先を急がせて

いただきます。

## 十　危うかった『新新訳源氏物語』刊行にいたるまでの経緯

こんにち、晶子の『源氏物語』の訳業として広く知られるのは、その晩年に今一度勇を奮い起こして書いた『新新訳源氏物語』です。

『新新訳源氏物語』全六巻の初版には、同じ初版でも、函がソフトな感じのものとハードな感じのものと二組あります。

第一巻の函と表紙。この装幀は正宗得三郎になるものですが、豪華絢爛たる『新訳』に比べると、瀟洒ではあるけれども、いたって地味です。しかしながら、晶子が晩年の勇を奮い起こして書き、今日、与謝野晶子の『全訳源氏物語』として知られているのは、この版によるものです。

資料に関係年譜をあげておきましたが、晶子が再び『源氏』訳に取り組むようになったのは、昭和八年九月から刊行が開始され翌九年九月に完結した改造社版の『与謝野晶子全集』全十三巻が出たのが大きな機縁です。

昭和九年十二月刊の「冬柏」の記事には、全集の増巻として、『新新訳源氏物語』が加えられることが決まって忙しくしているとあります。全集の完結からできるだけ時をおかずに出す予定だったでしょうから、最初から、猛烈なスピードで取り組まなければならなかったことになります。

しかしどうでしょうか。昭和十年三月二十六日。二月に引いた風邪がもとであっけなく夫の寛が世を去っています。

ここで『新新訳』の訳業は頓挫してしまいます。一家を支えてゆく経済的事情に加えてなによりも夫寛という心の支えを失ったことが大きかったでしょう。この時までに書かれていたのは、「橋姫」までの草稿と、「若菜」までの清書稿であったといいます。

結局、改造社版全集の増巻として『新新訳源氏物語』が日の目をみることはなかったわけです。

あの幻の『講義』と同様、『新新訳』にも挫折の不幸が待ち受けていたことになります。

しかしながら、こうして中断していた訳業が、東京から撤退していた金尾文淵堂の金尾種次郎と京都で再び会ったところから、再開されることになります。こうして、昭和十二年の秋以降、再び晶子は『新新訳』の完成にとりくむことになります。

『新新訳源氏物語』は、昭和十三年十月二十一日に第一巻が出て、昭和十四年九月十二日に第六巻が出て完結しています。

この間、晶子は、それこそ時間と争うように書き継いで、その最終巻の原稿を書き上げたのは、昭和十四年七月六日のことでした。そして、十月三日に上野精養軒で「新新訳源氏物語刊行記念祝賀会」が開催されたことは、いちばん初めにお話しいたしました。

その日、晶子は、裾に、二葉葵の文様が縫い取られている着物を着て、出席者は全員、二葉葵を胸にさしたと、雑誌『冬柏』は書いております。

このように出版にいたる事情を、整理、勘案してみますと、『新新訳』は、その当初から、諸注釈を眺め、じっくり訳を吟味し、推敲に推敲を重ねての成果というような性格のものではない、ということがわかってまいります。「直ぐに書き初め、書き続け、少ない余命の終わらぬ間を急いだ」という、まさにその結果、完結にたどりついたものとみられるわけです。

## 十一　『新新訳源氏物語』自筆草稿に晶子の訳業の本質をみる

そういう『新新訳源氏物語』の生まれ出る現場を眺めて、その本質を感じとっていただきましょう。

じつは、『新新訳』の自筆草稿が、鞍馬寺と堺市にあわせて六一一枚残っているのです。そのうちの一枚、鞍馬寺所蔵の玉鬘巻の三枚目をながめて見ますと、もうれつなスピードで書いていることがわかります。原稿の枠など無視。漢字なんかいちいち書いてられない。かなが目立ちます。

そして、晶子が点線にしてあるところは、じつは、和歌や引歌のあるところです。これは、書き写しているのは、面倒とばかりに、「桐壺」巻から一貫して省略しておりまして、あとで書き入れたことがわかります。じつは、『新新訳』の和歌の本文には問題があることを指摘だけしておきたいと思います。

この原稿は、草稿なのでありまして、それが清書され、その清書原稿がもとになって、『新新訳』本文になるわけです。残念ながら、清書原稿は残っていません。さきほどの草稿を書き起こして、実際の『新新訳』の姿と比べてみますと、結論だけを申しますと、じつはこの草稿の勢いというものが、基本的に刊本に持ち込まれていると判断されます。

これはどういうことか、といいますと、まあ、六一一枚分の一枚だけから言うのは乱暴のそしりを免れませんが、晶子の『源氏物語』の訳業というのは、諸注釈を眺めながら、ああでもないこうでもないと思案した結果に書かれたものなどではない。晶子の体内から迸り、溢れ出るようにして、次から次に生み出された晶子じしんの言葉としてある、そういうふうなことがみえてくるのではないかと思います。

最近の研究では、谷崎源氏は、「作家谷崎潤一郎の個人の仕事としてではなく、複数の関係者が関与した事業として捉えるべきである」ということが指摘されております。瀬戸内寂聴の訳についていえば、あらかじめ私も知っているある学者が下訳を準備したようですし、編集者が従来の訳文を横にならべて一覧できるような資料が用意されたとも伝え聞いております。

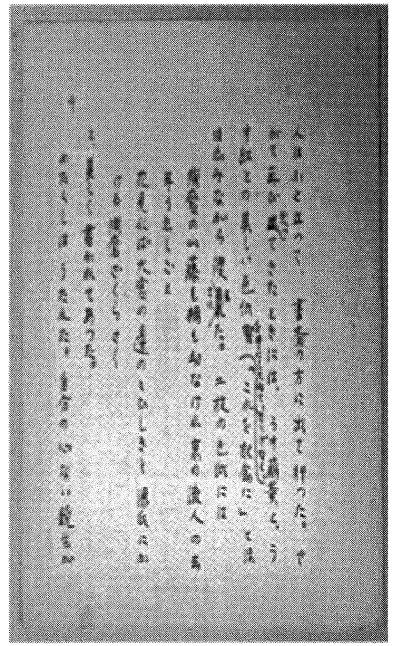
ですから、こうしてみると、あらためて、晶子の『新新訳』は、生涯にわたって晶子の体内に内在化され蓄積化された『源氏物語』を、いわば紫式部に同化した晶子じしんが、みずからの言葉として紡ぎだした文学作品である、ということがおわかりいただけるのではないでしょうか。

晶子の生涯にわたるこの訳業が、広く『源氏物語』を国民文学たらしめ、さらに『源氏物語』を世界の文学にして、そして『源氏物語』を未来へと導いてゆく基盤をなし、その訳の魅力は、今なお輝いて私たちの前にあるのだと思います。

本稿は、平成二十九年七月二十二日、東洋大学日本文学文化学会の席上で行った講演を原稿化したものである。講演では、画像を数

多くごらんいただいたが、本稿では文章で読んでご理解いただけるようできるだけ書き改めた。しかるになお、画像や配布資料を前提にした文章のままである箇所が散見する。お断りしてお詫びする。幸い、池田亀鑑直筆原稿の掲載をお許しいただけたこと、ご所蔵者の和田琢磨先生並びに日本文学文化学会に厚く御礼申しあげるしだいである。

（跡見学園女子大学名誉教授）



池田亀鑑『つつじ』直筆原稿